

展示・収蔵品より

美を知る

336

晩秋のみぎり、本県を含む北東北は、間もなく紅葉の見頃を迎える。本稿では、三河(現在の愛知県東部)で生まれた江戸後期の紀行家・菅江真澄(1754~1829年)が、各地で描いた紅葉に関する図絵を紹介する。

図1は田代潟(現能代市二ツ井町)の様子を描いたもの。真澄が当地を訪れたのは、文化二(1805)年九月九日のこと。現在の暦でいえば、10月末ごろとなる。

周囲の山は杉や檜などの常緑樹が多くあるが、田代潟の周りには落葉樹が多く、色を尽くすかのように紅葉していた。そしてそれは、深さのある潟の底にまで錦を敷くかのように見えた

「みかべのようい」より意識
紀行文(日記)の中で、真澄がその美しさを賞賛しているように、図絵に描かれている紅葉は、赤、黄、茶など、

企画展「かく、えがく。—菅江真澄遺墨資料展—」

紅葉の錦秋鮮やかに

は「里の者は「金樹の紅葉」と言っている」と、図絵説明文に記す。「金樹は「金木」の意で、ナラ、クリ、クヌギなどの「堅木」を指したものでろう。

図2は、紅葉した木々の中にヤマブドウとサナヅラを見つけたさまを描いている。場所は現在の青森県東通村周辺。真澄が当地を訪れたのは寛政六(1794)年十月二日。これも現在の暦でいえば、10月末ごろとなる。図絵左上、大きいものが「ヤマブドウ」で、図絵右下、小さいものが「サナヅラ」である。山野に自生していたのであろう。真澄は図絵説明文中に次のように記している。

山ぶどう、あるいは黒ぶどう、大ぶどうなどという。味は特別良く、このあたりの人は「うまい」といって採って食べる。また小ぶどう、あるいはさなづらも味は大ぶどうと同じである

「奥の冬ごもり」より意識
土地の人が「うまい」と言っている。実の色も同様で、ウを、おそらくは真澄も味わったのではないだろうか。

実を覆い隠すほど大きな葉は、赤や薄い橙、黄色に色づき、既に枯れかかった箇所は灰色や茶色に変色している。一口に「紅葉」といっても、色の変わりようはさまざまで、真澄は細部までよく観察して描いている。実の色も同様で、色の濃い部分と薄い部分を描き分けている。観察に基づいた写実的な描きぶりである。

図3は、真澄が描いたというより、「拓本」を採ったもの。カエデの葉に赤や黄色の顔料を塗って、そのまま紙に押し当てた、いわゆる「葉拓」である。寛政十(1798)年九月末ごろ、真澄は中野(現青森県黒石市)の山里にある浅尾山の紅葉が盛りだと聞き、見に行く。現在「中野もみじ山」として知られる場所である。本図の前頁には、赤や黄に見事に色づいた木々の

中野村に着いた。川が流れ、橋が架かっている。岸辺の高低とろや、岩場、坂の上の木々など、高い木も低い木も皆等しく紅葉していた。流れ落ちる水は滝となり、はらはらと散る葉を夕日が照らす。何とも風情がある

「桜がかり紅葉がかり」(国重要文化財「菅江真澄遊覧記」の1冊)より 個人蔵



図1 「みかべのようい」(国重要文化財「菅江真澄遊覧記」の1冊)より 個人蔵



図3 「桜がかり紅葉がかり」(国重要文化財「菅江真澄遊覧記」の1冊)より 個人蔵



図2 「奥の冬ごもり」(県指定文化財「菅江真澄著作」の1冊)より 大館市立栗盛記念図書館蔵

×E 企画展「かく、えがく。—菅江真澄遺墨資料展—」は11月16日まで。菅江真澄の記録を「記す」「寿(ことほ)ぐ/呪まじなう」といった手法や、「自然」「動植物」といった掲載内容に準じて紹介する。開館時間は午前9時半~午後4時半(11月以降は4時)。月曜休館(休日の場合は翌平日)。観覧無料。11月9日は午後1時半から、宮城学院女子大名誉教授で岩手県一関市博物館館長の菊池勇夫さんを講師に講演会を開催(定員80人、要申し込み)。10月26日と最終日の11月16日は午後2時から、本欄執筆の角崎学芸主事による展示解説会(申し込み不要)を開く。県立博物館 018・873・4121

中野村に着いた。川が流れ、橋が架かっている。岸辺の高低とろや、岩場、坂の上の木々など、高い木も低い木も皆等しく紅葉していた。流れ落ちる水は滝となり、はらはらと散る葉を夕日が照らす。何とも風情がある

「桜がかり紅葉がかり」より意識

葉拓を採ったカエデは、真澄が当地で拾ったものだろう。一番大きな葉は、葉脈までくっきりと写し採れている。また黄色の葉は、その先端だけが赤く染まっている。葉拓とはいえ、真澄が細かい部分までも再現しようと試みたことが分かる。

現在、当館では企画展「かく、えがく。—菅江真澄遺墨資料展—」を開催している。本稿で紹介した図絵も展示している。ぜひ精緻に描かれた真澄の図絵を、実際にその目で見ていただければと思う。

(県立博物館学芸主事・角崎大)